

## 脳卒中発症前に適切な抗凝固療法を受けていたのはわずか 2 割

抗血栓療法は心房細動患者の脳卒中を予防することが知られているが、地域診療においては十分に活用されていない。本研究では、心房細動の既往のある急性虚血性脳卒中患者について、脳卒中の発症前にガイドラインで推奨されている抗血栓療法を受けていない患者と抗血栓療法を受けている患者の脳卒中の重症度と院内転帰を評価した。

2012年10月から2015年3月に、米国心臓協会(AHA)/米国脳卒中協会(ASA)によるプログラム (Get With the Guidelines-Stroke) に参加した、心房細動の既往歴のある急性虚血性脳卒中患者 94,474 例 (平均年齢 79.9 歳、女性 57.0%) を対象に後ろ向き観察研究を実施した。その結果、脳卒中発症時に治療量のワルファリンが投与されていたのは 7,176 例 (7.6%)、非ビタミンK拮抗経口凝固薬が投与されていたのは 8,290 例 (8.8%) であった。79,008 例(83.6%)は脳卒中発症前に適切な抗凝固療法を受けていなかった。また、脳卒中発症時に 12,751 例 (13.5%) が治療量に満たないワルファリンが投与されており、37,674 例 (39.9%) は抗血小板薬のみが投与され、28,583 例(30.3%) は抗血栓療法を一切受けていなかった。高リスクの患者 91,155 例 (96.5%) のうち、76,071 例 (83.5%) が脳卒中発症前に適切な抗凝固療法を受けていなかった。交絡因子で補正後の中等度～重度脳卒中の発症率は、非投与群に比べると治療量ワルファリン群、非ビタミンK拮抗経口凝固薬群、抗血小板薬単独群で有意に低かった (補正オッズ比はそれぞれ 0.56、0.65、0.88)。院内死亡率についても有意に低かった (同 : 0.75、0.79、0.83)。

したがって、脳卒中発症前に適切な抗凝固療法を受けていたのはわずか 16%であることが明らかとなった。また、心房細動の患者に適切な抗凝固療法を行うことにより、中等度～重度脳卒中の発症率や院内死亡率が低下することも示された。

出典 : Journal of American Medical Association. 2017; 317(10): 1057-1067